

## 【Youth Match Racing World Championship 2018 出場報告書】



2018年7月10日

日本代表選抜チーム

菅原 雅史

岩井 俊樹

岡田 一輝

吉富 愛

## 『Youth Match Racing World Championship 2018』 出場報告

菅原雅史

2018年7月3日(火)～7月8日(日)までイタリア・トレンティーノ州のレドロ湖にて開催された『Youth Match Racing World Championship』に、日本代表として参加しましたので、以下の通りご報告いたします。

### 記

#### 1、日程

6月30日(土)イタリア・ベニス国際空港到着

7月3日(火)受付／体重測定、事前練習、開会セレモニー

4日(水)ステージ1 ラウンドロビン

5日(木)ステージ1 ラウンドロビン

6日(金)ステージ1 ラウンドロビン、ステージ2 ラウンドロビン

7日(土)ステージ2 ラウンドロビン

8日(日)ステージ2 ラウンドロビン、セミファイナル、ファイナル、閉会式

9日(月)ベニス国際空港出発

※レース期間中の夕方はアンパイアとのデブリーフィングが行われた。また、5～7日の夕方には Press Conference が開催された。

#### 2、日本チームメンバー

日本チームは以下の4名で構成された。

菅原雅史 (スキッパー、東京大学)

岩井俊樹 (バウマン、早稲田大学)

岡田一輝 (トリマー、東京大学)

吉富 愛 (ピット、神戸大学)

#### 3、出場国

11カ国12チームが参加した。世界ランキング100位以内が5チームエントリーするなどハイレベルな戦いとなった。

Country	Name	World Ranking
Italy	Ettore BOTTICINI	5
Australia	Will BOULDEN	12
Great Britain	Matt WHITFIELD	40
France	Aurelien PIERROZ	58

Sweden	Johanna BERGQVIST	59
New Zealand	Nick EGNOT-JOHNSON	110
United States	Christopher WEIS	157
Denmark	Jeppe BORCH	209
Japan	Masashi SUGAWARA	362
Russia	Misha EVITKHOV	398
Spain	Joan FREIXA	N/A
Italy	Federico FORNASARI	N/A

#### 4、競技艇

J/22 を使用し、競技艇のセールはメインセール、ジブセール、スピナーカー各 1 枚によって構成された。

#### 5、レース運営

- ・湖であり風の強弱や振れが激しく、また、風のない時間も長かったが、レース運営自体は円滑に実施され、ダブルラウンドロビンを消化することができた。一方で、5 位以降の順位決定戦は実施されなかった。
- ・フィニッシュラインがスタートラインと別に形成されていたため、進行中のマッチのフィニッシュを待つことなく次のマッチを進めていた。
- ・風上にあらかじめ 4 つのマークを設置しており、風が振れた際にマークの色を表示することでコース変更を行っていた。このためマーク打ち換えの時間等がなく、効率的にレースを実施することが出来ていた。
- ・8 艇がレースに使用され、また、待機場所およびハーバーからレースエリアまではモーターボートで 2 分程度の距離であったため、乗せ替え等もスムーズに行われた。
- ・修理器具や備品を積んだ専用ボートがあり、レース艇にトラブルが生じたときもそのボートがすぐに対応することが出来ていた。

#### 6、コース

- ・コースはソーセージコース(スタート・上・下・上・フィニッシュ)で、1 フライトの時間がおおよそ 25 分程度で完了するレグの長さで設定された。
- ・風上にはマークを 4 つ定め、風に応じてスムーズにコース変更できるようにしていた。フィニッシュラインはスタートラインの本船とその右側に打たれたフィニッシュアウターで形成されていたため、異なるマッチのフィニッシュとスタートが入り乱れることなく円滑にレース進行されていた。

## 7、規則

RRS の付則 C を含み規則に準じて行われた。クラスルールは適用されず、帆走指示書にて記載された競技艇取り扱い規則が適用された。

## 8、レース結果

最終成績は以下の通りであった。

- 1 位 Botticini (ITA)
- 2 位 Boulden (AUS)
- 3 位 Weis (USA)
- 4 位 Egnot Johnson (NZL)
- 5 位 Bergqvist (SWE)
- 6 位 Pierroz (FRA)
- 7 位 Borch (DEN)
- 8 位 Whitfield (GBR)
- 9 位 Sugawara (JPN)
- 10 位 Fornasari (ITA)
- 11 位 Evtikhov (RUS)
- 12 位 Freixa (ESP)

## 9、参加費用

大会参加費は、大会期間中の艇のチャーター料金・宿泊・食事等を含めてチームで 2500 ユーロであった。JSAF により負担して頂いた。

## 10、所感

今回、日本代表チームとして JSAF/JYMA から多大なるご支援を頂いて出場することが出来た。開催地がイタリアということもあって遠征費用は高額となり、こうしたご支援がなければ参加することは出来なかったため、この場を借りてお礼申し上げます。

今大会はユースのマッチレースの中では最も格の高い大会の 1 つということもあり、上位チームの選手はプロセラーを目指している（もしくは既に活動している）選手が多く、参加チームのレベルは高いものだった。

実際、全体的なボートハンドリングやタイム&ディスタンス、状況判断の早さなどは彼らの方が上回っていることも痛感した。その一方で、つけている隙の無い圧倒的な実力差を感じたのは優勝したイタリアチームのみであり、その他のチームに対しては勝機があり、マッチレース経験の少なさによる判断ミスやプレッシャーなどから自

減・逆転をゆるすパターンも多かった。レースごとに非常に悔しい思いをしたが、同時に今後もマッチレースを続けて経験を積んでいけば、彼らと戦えるのではないかと感じており、経験を積んだ上で再度彼らと戦い、今度は勝ち切りたいと強く思っている。

また、この大会は大学からヨットを始めた私にとっては初めての国際大会であり遠征準備等不安だらけであったが、実際にレースが始まってみると国際大会ならではの雰囲気や緊張感を味わい、他国選手との交流を深めることが出来た（アンパイアとして参加されていた田中さん曰く、以前の大会と比べて他国と交流できていたとのこと）。こういったことも含めて自分の積んだ経験を後輩に伝えて、来年以降彼らがより良い成績を残せるように尽力したい。

その一方で日本チームが活躍する難しさも感じた。今大会の現在のフォーマットはU23であり、これはインカレを終えた4年生の代のうち早生まれの人しかこの大会に参加できないということを意味する。そして、日本のほとんどの大学生セーラーの目標がインカレであり初めてマッチレースを経験する場がU25&大学マッチであることを考えると、他国の選手に比べてマッチレースを経験する時間が圧倒的に少ない（しかも多くの場合4月から社会人になるため練習する時間もあまりとれない）。4年前に市川スキッパー率いる日本チームが4位という成績を収めた際はU25であったためにインカレ終了からマッチレース活動をする時間があったが、レースフォーマットが変更された現在、日本チームにとってこの大会で上位を狙うための環境をどう整えるかも考えていく必要があると感じた。

以上

参考：BULKHEAD MAGAZINE 掲載記事

## Youth Match Racing World Championship に出場して

レポート/スキッパー 菅原雅史

7月3～8日に北イタリアのトレント州レドロ湖にて Youth Match Racing World Championship が開催され、3月に行われた U25 & 学生マッチでこの大会への参加資格を得た僕と3人のチームメンバー（岩井俊樹、岡田一輝、吉富愛）の4人が日本代表として参加してきました。



レースの行われたレドロ湖



日本チーム。左から吉富（神戸大）、岩井（早稲田大）、岡田（東京大）、菅原（東京大）

この大会は 23 歳以下のユースのマッチレーサーの世界一を決める大会であり、11 カ国から 12 チームが参加しました。プロセラーを目指す選手にとっては登竜門となっている大会でもあるため特に上位チームのレベルは高く、熱い戦いが繰り広げられました。



大会初日には村を練り歩く開会パレードが行われました。



他チームとの交流も醍醐味の一つです。写真は風待ち中に一緒に UNO をしたフランス・イタリアチーム。

最終結果は以下の通りです。

- 1位 Botticini (ITA)
- 2位 Boulden (AUS)
- 3位 Weis (USA)
- 4位 Egnot Johnson (NZL)
- 5位 Bergqvist (SWE)
- 6位 Pierroz (FRA)
- 7位 Borch (DEN)
- 8位 Whitfield (GBR)
- 9位 Sugawara (JPN)
- 10位 Fornasari (ITA)
- 11位 Evtikhov (RUS)
- 12位 Freixa (ESP)

僕たち日本チームは9位という結果で終わりました。

レースはダブルラウンドロビン（総当たり戦を2回行う形式）の後、上位4チームとその他のチームに分かれて順位決定戦を行うというフォーマットが予定されていました。我々は最初の2連戦で連勝したものの、その後は苦しい戦いが続き、ファースト・セカンドラウンドロビンともに3勝8敗に終わり、時間の関係で5位以下の順位決定戦が省略されたために、ラウンドロビンの成績がそのまま最終的な成績となりました。

以下、この大会に出場して感じたことを、主に現役大学生に向けて書いていきたいと思いません。

#### 【マッチレースという世界に入って】

僕は3月に行われたU25&大学対抗マッチからスキッパーとしてマッチレースを始めました。この大会でU23の枠で1位になったためにYouth Match Racing World Championshipの出場権を得ることができたものの、出場するにあたって他のチームに比べてマッチレース・キールボートの経験が少ないことは否めませんでした。

実際、走りのスピードは変わらないものの、Stop&Goといったスピードコントロールやタイム&ディスタンスの判断の正確さなどマッチレースに必須の技術は他国の上位チームの方が優れていました。一方で、優勝したイタリアチームを除けば、他のチームの全てに対して勝機があり、マッチレース経験の少なさによる判断ミスやプレッシャーなどから自滅・逆転をゆるすパターンも多かったのも事実です。悔しさを感じると同時に、今後マッチレース

の経験を積んでいくことで彼らと十分に戦えるのではないかという可能性も感じています。



マッチレース中の様子。1対1の緊張感のあるレースが行われる。

#### 【英語力】

4年前にこの大会に出場した市川スキッパーのレポートにも書いてありましたが、国際大会においては英語力が必須のスキルです。

スキッパー・ミーティングやアンパイアとのデブリーフィングも英語で行われますし、英語が出来なければ他国チームの選手と交流することも出来ません。その上で、今回特に強く感じたのが、“ヨットに関することを明確に説明できる英語力”が必要だということです。実際、出場12チーム中8チームは非英語圏のはずなのですが、全スキッパーが英語を使いこなしており、様々な場面で自分の考えていることをしっかり伝えていました。

実は今回、マッチレースの大会でありながら、僕たちの勝利したレースで相手チームからレース委員会に抗議が出されたために審問が行われる場面がありました（通常のマッチレースではレース中のその場でジャッジが行われるため審問はありません）。レース中風が大きく振れ、それに上手に対応した我々が相手を逆転したのですが、その状況でレースを続行したのは Unfair であるというのが相手の主張でした。

結果としては、その風の振れがあっても相手がリードを保てる可能性が十分にあったことを何とか伝えることが出来て、我々の勝利が取り消される事態にはならず済んだのですが、もし自分の主張が伝わらず、相手の主張が認められることになれば、勝ちレースが取り消される事態になるところであり、“ヨットに関することを明確に説明できる英語力”が必要であることを強く実感しました。

### 【インカレセーラーのその後】

ところで、日本の大学生セーラーはインカレ一辺倒で、海外のセーラーのように様々な艇種やレース形式に触れることがないまま引退を迎え、ヨットをやめてしまうとよく言われます。ですが、インカレの世界を終えた後にヨットをやめてしまうのは、正直もったいないと思います。

フリートレースでは使わないような操船技術、それらを駆使しつつ相手が全力で自分だけを倒しにくるという圧倒的な緊張感、(短いレースを数多くこなすという形式のために)レガッタを通じて得られる経験値の多さ、そして何より相手を抑え込んで勝利したときの嬉しさ。どれをとってもマッチレースにはインカレとはまた違う世界が広がっていました。僕自身大学からヨットを始め、4年間スナイプに乗ってインカレを最終目標にしていたが、引退後もマッチレースという形でヨットを続けてよかったと思っています。このレポートを読んだ現役大学生セーラーの皆さんも、騙されたと思って、引退後にマッチレースの世界に挑戦してみてもはどうでしょうか？(来年も3月にU25&学生マッチが開催されるはずです！ぜひ参加してみてください！)



イタリア、スペイン、ロシアチームと

最後に、この大会に出場するにあたって、ご支援頂いた JSAF・JYMA の皆様、応援して下さった皆様には重ねてお礼申し上げます。

今大会では、12 チーム中 9 位という成績で終わった我々ですが、今後もセーリングの世界で挑戦を続けていきたいと思っています。このたびは私たちを応援して頂き本当にありがとうございました。